

唯識思想と現象学

——比較論的諸観点の提示を通して——

司馬 春 英

フッサールは自らの現象学を、あらゆる客観的意味形成の根源的な場としての超越論的主観性へ立ち帰り、存在する世界を意味形成体ないし妥当形成体として理解しようとする、徹底した超越論哲学として自認し、客観主義的前提に無自覚なまま依存している科学的理性に対する根底的な批判を企てた。一方、唯識思想は我法の仮説を遍計所執性として剔削し、その迷妄の依って来る所以を依他起的な「識転変」の「事」に探った。確かに、クロノロジカルには唯識論に近代科学批判があり得ようはずもなく、またそれはアビダルマの法実在論と中観派の「空」を綜合しつつ「転依」に至る道を示そうとしたのであり、その限り唯識論と現象学は時代も問題も隔絶している。しかし対象認識を素朴に無自覚のまま遂行している我々の知の構造に透徹するために、一方は超越論的主観性の意味構成作用の解明に向かい、他方は仮説の所依た

る識の因縁生起を闡明するという点で、両者に平行関係とも言うべき共通性が認められる。ただ、これだけでは対象的な知の可能性の条件へと向かう問いの共有を指摘しただけで、唯識論を何故カントではなく現象学と対比するかという必然性をまだ明確に示し得ていない。本論はこの必然性を次の三点に探るものである。

① 現象学的還元と唯識三性説

対象帰依的な自然的態度が遍計所執性に比定されるなら、その自明性・匿名性の自覚化としての超越論的還元によって露呈されてくる超越論的生の領野こそ依他起的「事」の世界と解され得るであろう。

② 阿頼耶識縁起における「種子生現行、現行薫種子」と後期フッサールの「超越論的歴史」

フッサール後期思想は、中期のデカルト的方途に基づく超越論

的主観性の呈示を自己批判しつつ、超越論的機能を担う主観の自己構成そのものの内に、沈殿した意味構成の歴史を露呈する「発生的構成分析」に向かった。一方、阿頼耶識縁起における標記の言葉は、現行識とその依止たる阿頼耶識の交互循環の内に、現行識の薫習による種子が次利那の現行識における世界現出を規定してゆく構造を解明している。薫習された種子は後統の現行識に対して超越論的機能を持つが、この機能は無始爾來の流れとしての阿頼耶識に薫習された、沈殿した歴史に根差している。果転変における見分―相分の相関がノエシス・ノエマの静態的構成に比せられるとすれば、識そのものの因縁生起たる因転変は、カントには見られないこのフッサールの「超越論的歴史」の開示にこそ對比されるべきであろう。

③ 現象学的反省論のアポリアと唯識三性説

——「顕現せざるものの現象学」への道

「生き生きした現在」の分析は現象学的反省の遂行そのものが反省に先立つ自我の原一分裂を前提することを示した。ここに現象学は先反省的な反省根拠、つまり反省的対立を可能にする根源的な裂け目の生起に立ち会うことになる。この生起の事態は、知の対象面から身を退ける仕方においてのみ知の形成作用を可能にしている非一対象的经验の次元に属する。この生起への歩み戻りを三性説における「依他起における遍計所執からの常時の遠離性が円成実性なり」（『三十頌』第二二頌）という規定と対比しつつ考察

したい。

「一」 還元における態度転換と三性説

まず最初に、唯識学派の説く「三性説」を、フッサールの現象学的還元における自然的態度から超越論的態度への態度的転換と対比しつつ、それらの間に見られる対応関係を比較論的に考察しておきたい。「唯識三十頌」に従えば、唯識論の主題は①識転変論、②三性説、③修道論（転依・二智）の三つの柱からなると考えられるが、このうち「識転変論」は、識の三層構造や阿頼耶識と現行識との織り成す交互因果等の精緻な分析を含み、歴史的には阿毘達磨俱舍論や經量部の教説を踏まえつつ、それを大乘の立場から阿頼耶識縁起論として総合したものと考えられるに對し、「三性説」は、「三無性説」と對をなし、古来「唯識中道」の所説とされてきたように、瑜伽行がそもそも空の思想によって一貫せられるために最も重要な位置を占めている。この点について長尾雅人氏は「三性説は菩薩道精神の中核を衝くもの」であり、「識論は必ず転識得智して、即ち識を転換して仏果に向かうという実践論を伴わなくては、仏教的な意味を生じない。しかもその為には三性論の裏付けが必要であろう」と述べ、その根拠として、「竜樹に於いては一般に自性の否定のみが考えられ、媒介としての否定の場所が考えられるわけではない」が、「空性全現の為に、殊に宗義上の理論的根拠の為に、寧ろ否定せらるべき媒介

が必要となる⁽³⁾」ということ、そして依他起性こそ、遍計所執性と円成実性との媒介者ないし統一者の位置に立つということを挙げている。遍計執が捨離されて円成実が顕現される「転依」が可能となるにも、この捨離がそこに於いてなされる場としての依他起性が必要なのである。さて、三性説が真なる涅槃の世界と言語的に分節された現象世界との逆説的な同一性と差異の関係（「非一非異」）を主題とし、そこで人間の世界への根本態度の相違が問題となる限り、三性それぞれの関係とフッサールの現象学的還元における態度転換とを比較検討することは可能でもあると同時に、比較論的に重要なテーマともなるであろう。

まず遍計所執性は表象され、対象化された世界に生きる我々の在り方を示し、客観的時間—空間にある世界と主観的所与としての自我との日常的、経験的把握（我法の仮説）を含み、言語的分節化による思念（虚妄分別）を特徴とする。この点から、それはフッサールの「自然的態度」に比定できよう。自然的態度とは対象に向かって直進する（Geradlin）態度、対象帰依的態度、「世界の中に入って生きる」態度であり、日常性とともに科学的認識（自然主義的態度）もこれに属する。この態度の特質は「自明性」にあり、世界という自明的先所与性を前提し、世界確信を地盤としつつ、そのこと自身を主題化し得ない点で、「世界に拘束されて」おり、また反省においても、それが直進的意識の平面で為される限り（実証的心理学）、反省する自我そのものは「匿名

的」、「自己忘却的」である。意識が遂行態にある限り陥っているこうした対象帰依的・直進的「素朴性」、それこそ「遍計所執性」と言えよう。

次に依他起性であるが、それは比較の順序からすればフッサールの「超越論的態度」に比定さるべきことが予想されるが、ここでは慎重に相違をも見定めた査定が要求されるであろう。共通性を指摘するためにまず、依他起性が「我法の仮説」（遍計所執の迷いの世界）の拠って来る所依として位置付けられ、さらにそれが「因縁生起」する「事」に求められていることに注目したい。世間的仮説が「識の所変に依る」（第一頌）とされている点は超越論的還元にも、そして「是諸識転変、分別所分別」（第十七頌）は超越論的構成論に対応すると解される。フッサールにとって「超越論的」問題とは、何よりも上述の「自明性」、「自己忘却性」の自覚化であり、先所与的「世界」についての構成問題である。それに対応して、超越論的主観性とは徹底した世界（内的）関心の抑制から明るみにもたらされる世界構成的主観性であり、超越論的エポケーとは自然的態度における主観性の自己理解、自己自身を世界の中での存在者とみなす自然的自己理解の徹底した拒絶である。このような抑制（エポケー）は、「私のこれまでの生全体の普遍的批判⁽⁴⁾」として、顕在的作用だけでなく、習性化してハビテュエールに妥当し続ける一切の意識能作にわたるものでなければならぬ。ここで要求される抑制への包括的な意志決断の可能性の問

題は、主観性の局在化のパラドックスとも絡み、後に現象学的反省の遂行そのものに潜む匿名性という反省論のアポリアへの直面を余儀なくさせる困難な壁である。とはいえ、ここで意識が非主題的・非顯在的な諸相を含む「無限限な生の連関」として捉えられていることは注目値する。それは、依他起における因縁生が阿頼耶識縁起論として展開されることと軌を一にしているのである。この点については「二」で論及する。

次に、依他起と超越論的態度の相違点について若干見ておきたい。和辻哲郎は縁起において「法を觀する」こととフッサールの本質直観を等置する可能性を示唆したが、この次元ではむしろ兩者の相違に注目すべきである。フッサールは伝統的哲学に対して、形相的還元を導入し、ノエシス・ノエマの意識相関分析という領野を拓いた。唯識学派もまた当時の実在論的傾向に対して識論を展開し、特に護法は「識体転じて二分に似る」というノエシス・ノエマ相関にも比定すべき見解を示している。しかし、この理論的側面は禪定において法の空性を觀する修習への前段階であり、特に三性説はこの実践面と切り離せないことは先述のごとくである。ノエシス・ノエマ相関が反省可能かつ直示可能な所与として分析され、その反省の場が当初は自我論的先定のもとにあったことは否めないのに対し、唯識におけるエポケーは、あらゆる自我中心的な契機から解き放たれた全実存的な転換であり、理論的觀察者を予想する「反省」とは異なるものである。ただ、この対比

は中期フッサールとの関係において典型的に言われることであって、後期フッサールとの関係においてはまた異なった様相を呈してくる。ここでは先ー反省的・先ー對象的・先ー言語的な意味連関、つまり受動的綜合の領域に光が当てられてくるからであり、さらにそこから、反省を可能としつつ反省に取り込まれないもの、反省そのものにはらまれる原理的匿名性の問題が浮上し、現象学的思惟が自らの隠された根に如何にして歩み戻り得るかが問われてくるからである。ここでは現象学的反省の臨界において、地平とその地平を成り立たせている深みの次元との交錯が問われ、反省の質そのものが中期とは異なってくる。しかしやはり、自然的遂行の抑制を意志するという反省の動機の問題は残るであろう。もし和辻が現象学のこうした展開を射程に入れて上記の同定を行っていたとすれば、それは瞠目すべきことである。この次元の問題は、反省論のアポリアと依他起から円成実への転換との関連の問題として「三」において論及する。

「二」 阿頼耶識縁起と超越論的歴史性

『成唯識論』に、「種子生現行・現行薰種子」、「三法展転・因果同時」という言葉がある。この言葉は依他起における因縁生起の子細を阿頼耶識縁起として端的に語っている。種子とは阿頼耶識に蔵された生果の功能、潜在余力であり、現行とはそこから現出してくる現象世界であり、種子の段階では隠れ沈んでいた潜勢態

が頭れ起こってくることを意味する。ここで問題となるのは「因果同時」の意味であろう。安田理深氏は「種子とは、経験の可能根拠、経験のアプリオリである。経験と経験の先験的根拠は同時である⁽⁹⁾」と述べている。その限り、種子の先験性はカント的意味においても理解され得る。しかし、彼は他方で「阿頼耶識は無始爾来の経験である。個というものがそれ自身の構造として歴史的、世界的ものである。無始爾来の経験の蓄積、それが蔵である⁽¹⁰⁾」と、歴史性を強調する。ここにおいて我々は、先験的根拠そのものの歴史性という問題に直面しているのである。そして、この先験的根拠そのものにはらまれる経験の蓄積という「歴史性」を語るものこそ「現行薫種子」である。そしてこの点にこそ、我々が唯識論をカントの先験哲学よりもむしろフッサールの超越論的現象学と比較することをより適切と考える理由がある。種子から現行への方向とは逆の「所変が逆に作用する意味⁽¹¹⁾」をカントの先験性から読み取ることができない。カントでは経験といえは「empirisch」であるから、その先験的根拠は経験的ではあり得ない。しかし、唯識では識の依止もまた識であり、識の「三法展転」する「事」そのものが世界構成的な超越論的機能を担っており、したがってそれはフッサールの超越論的経験の領野に比定し得よう。その際、識転変の同時性は長尾雅人氏の言う「逆に時間や空間の根源となるもの⁽¹²⁾」、「刹那滅の性」を表し、「三法展転する「事」こそ、そこにおいて超越論的時間化が行われる時間構

成的事象であることを語るものであろう。

ここで、フッサールにとって超越論的問題とは、「自明性」の自覚化であり、習性化された非顕在的な相を含む「無際限な生の連関」の主題化であることを想起しよう。超越論的還元とは、「自らの働きの成果の中に閉じ込められた超越論的主観性⁽¹³⁾」を、その自己忘却性から解放することである。そのために、後期フッサールの発生的構成分析は、あらゆる妥当意味に含蓄され、沈殿された意味の歴史を「超越論的歴史性」として露呈するのである。イゾ・ケルン氏は、「現行薫種子」を発生的現象学の「沈殿」と解し、次のように述べている。「この意識の最深いレベルは、……種子という潜在能力という形で、ある意識の流れの歴史を含んでいる。この種子は、フッサールの言葉で言えば、意識の流れの歴史の沈殿、つまりその将来的経験に影響を与え、条件付ける沈殿である⁽¹⁴⁾」と。さらに彼は因能変と果能変を区別し、後者は現行識の見分が所縁に依って相分を現出することであり、その点で、現に妥当している意味対象についての静態的構成に相当するに対して、前者は現に妥当している意味形成体に志向的に含蓄された意味創出的な先能作を示し、そこから潜在的構成能作の諸相を通じて当の顕在的妥当意味が形成されてくる発生的構成を表していると考えるのである。つまり、因能変における種子の機能は「沈殿された歴史として、そのつどの構成された志向的統一の中に包含されている⁽¹⁵⁾」のであり、阿頼耶識の「蔵」とは、この沈殿された

志向的含蓄を意味していると考えられる。「三法展転」とは、「現行薫種子」が沈殿を生み、「種子生現行」がそれを前提して能作する限らない連鎖であり、阿頼耶識は、無始爾来の歴史を担いつつ、他のすべての識の依止として、そのつどの世界構成の基盤を成しているのである。したがって、阿頼耶識の開示は我々に、フッサールの言う次のような自覚を促すであろう。即ち「本当は我々は限らない生の連関の全体的統一の中に立っているものであり、私自身のそしてかつ相互主観的歴史的生の無限性の中に立っているのである」⁽¹⁸⁾という自覚である。

「三」 地平からの脱却と円成実性

——「顕現せざるものの現象学」への道

前節で扱った歴史性は、顕在的志向性の興行きの次元を成す「地平」として解明されてきたものである。確かに「地平」論の展開は現象学的思惟の切り拓いた大きな功績であり、それゆえ我々は阿頼耶識縁起をマナ識という自我統覚の地平領域として、「この統覚の意味能作、妥当能作が究極的にそこに由来する超越論的歴史性」⁽¹⁷⁾という地平として考察したのである。しかし、最近の現象学的思惟の深まりはむしろ、決して地平に姿を現さず、自らは絶えずそこから身を隠しつつ、地平的開けを可能としている機能へと向かう新たな方向性を拓いている。それは事象的には、「生き生きした現在」における自我の原分裂の生起において、反

省に先立ちつつ、現象学的反省を促してくる次元、つまり現象学を営むことそのものの匿名性の問題が気付かれ、さらにこの自己と自己との原一関係としての時間性ばかりでなく、自己と世界との原一関係としての身体性、自己と他者との原一関係としての相互主観性にも同様の原理的匿名性が纏わり付いていること、そしてそこには、一方が自ら身を却けることによって他を現出せしめるという否定を介した共属関係が重要な媒体機能を果たしていること⁽¹⁹⁾が見出されてきたことに由来する。ここに、現象学を遂行する思惟そのものが現れの圏域に姿を現さないという事態への気付きとともに、現象学的思惟が自らの隠された根に向かって歩み戻る可能性が問われてくることとなる。可視化現象（地平的広がり）を可能とする不可視の機能（垂直的深み）への歩み戻りは、しかし地平性の圏域の中での視の転換や沈殿されたものの回復といった従来の方法、つまり如何なる種類の「反省」も失効してしまう、反省の臨界点へと我々を連れ戻す。

この現在の現象学が至り着いた臨界点においてこそ、我々は唯識三性説の中心問題、つまり依他起と円成実との「非異・不非異」なる関係として語られている事態に真向かうことになる。依他起はいわばそこにおいて世界が開示される超越論的生であるが、それは常に遍計所執に覆われている。この覆いを外して超越論的生を取り戻すことなしには依他起は透明化されない。しかし、この覆いを取り外すことそのことに原理的匿名性が纏わり付いてい

るのである。依他起の「事」は、世界現出を可能にしつつ、世界を現出せしめるというまさにそのことによって自らを隠す。さらにこの「事」の「性」たる「唯識性」そのものに住するための修習の道程においてすら、この隠蔽構造が支配している。「現前に少物を立てて是れ唯識性と謂うも、有所得を以ての故に実に唯識に住するには非ず」(第二七頌)。このことは、我々の思惟がいかに「地平拘束性」を免れ得ないかを示している。この点で、地平拘束の思惟からは常に身を隠す「顕現せざるもの」をまさにそれとして尊重する後期ハイデガーの思惟の道が、そしてそこにおける「現れそのものの本質由来」への「垂直的歩み戻り」が着目されるべきであろう。それは「地平からの脱却」として特徴付けられる。「円成実性は依他起において常に遍計所執を遠離する性なり」と言われる。この「遠離」と「地平からの脱却」との比較論的考察は、きわめて重大な課題であるが、ここではすでに紙数が尽きてしまった。別稿を⁽⁶⁾参照いただければ幸いである。

- (1) 長尾雅人『中観と唯識』(岩波書店) 二〇〇頁。
- (2) *ibid.* 二三八頁。
- (3) *ibid.* 一九六頁。
- (4) この段については、新田義弘『現象学』(岩波書店) 五四―五九頁参照。
- (5) *ibid.* 七四―七五頁参照。
- (6) H. VIII, S.119. [H.: Husserliana]

- (7) *ibid.* S.154.
- (8) 和辻哲郎『原始仏教の実践哲学』(岩波書店) 一五四頁。
- (9) 『安田理深選集』第三卷(文栄堂) 一六頁。
- (10) *ibid.* 第二卷、一四二頁。
- (11) 長尾雅人『中観と唯識』二四三頁。
- (12) *ibid.* 二四三頁。
- (13) 新田義弘『現象学とは何か』(紀伊國屋書店) 一二七頁、講談社学術文庫版一五一―五二頁。
- (14) Iso Kern: Object, Objective Phenomenon and Objectivating Act According to the 'Vijñapti-mātrāsiddhi' of Xuanzang (600-664), in: Phenomenology and Indian Philosophy (ed. by D.P. Chattopadhyaya, L. Embree, J. Mohanty, State University of New York Press, 1992) p.265.
- (15) H. XVII, S.252.
- (16) H. VIII, S.153.
- (17) H. VI, S.212-13.
- (18) Yoshihiro Nitta: Der Weg zu einer Phänomenologie des Unscheinbaren, in: Zur philosophischen Aktualität Heideggers II (Hg. von D. Papenfuss und Otto Pöggeler, Vittorio Klostermann, 1990) S.45.
- (19) Yoshihiro Nitta: Das anonyme Medium in der Konstitution von mehrdimensionallem Wissen, in: Perspektiven und Probleme der Husserlschen Phänomenologie (Hg. von E. W. Orth, Alber, 1991) S.191.
- (20) 拙著『現象学と比較哲学』(北樹出版、一九九八年) 九九―一二頁。

(しほ・はるひで) 比較哲学、大正大学非常勤講師